

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の 代表者 (学長)	(大学名)	名古屋大学	機関番号	13901
	(ふりがなくローマ字) (氏名)	HIRANO SHIN-ICHI 平野 真一		

2. 大学の将来構想

名古屋大学は、我が国の基幹大学の一つとして、「ものづくり」の地域的伝統のうえに、輝かしい学術上の成果を挙げ、多くの優れた人材を輩出してきた。全国に先駆けて、大学の理念・長期目標とも言うべき「名古屋大学学術憲章」を制定し、研究教育と社会貢献の基本目標、研究教育体制と大学運営の基本方針を定めた。この長期目標を達成するために、研究教育の高度化・国際化と、文理融合を図ることを目指して、組織的再編・整備の大枠を定め、申請時の将来構想とした。将来構想とその関連事項は、以下のとおりである。

1) 研究教育組織の整備

1-1) 高等研究院の創設と展開：本院は世界トップクラスの研究や将来の新分野創出に繋がる萌芽的研究に取り組み、その成果を学内外に発信するため、一定期間、研究に専念する教員により構成する組織であり、平成14年度に、学内措置により設置した。21COEプログラムとの強い連携の下に、本学を代表する研究プロジェクトの優先的支援を行う。

1-2) 領域型研究教育組織の先端化と文理融合型研究教育組織の創設：21世紀においては、既存領域型研究科の再編及び更なる先端化とともに、文理融合型分野の学術の重要性が極めて大きくなる。本学は、平成13年度に環境学研究科、平成15年度に情報科学研究科を設置し、平成16年度にエコトピア科学研究機構を設置した。

1-3) 全学共通基盤組織の整備：研究教育基盤整備のために、博物館、核燃料管理施設、情報連携基盤センター、評価企画室、学生相談総合センター、セクシャル・ハラスメント相談所、災害対策室、AC21推進室、男女共同参画室、大学文書資料室、全学技術センター等を設置した。また、大型基盤研究を推進することを目的とした、研究センターの設置を検討している。

2) 社会連携推進体制の整備

本学は、研究成果を社会に還元する大学を目指している。その一つが社会連携推進体制であり、「点から面へ」(個人から組織へ)をキャッチフレーズに進めている。そのために、平成14年度に、社会連携推進室、産学官連携推進本部を学内措置により設置するとともに、平成15年度に、知的財産部を学内措置により設置し、積極的な外部人材の登用、知的財産に関する諸規定の整備等を含む体制の整備を行った。

3) 国際学術コンソーシアム (AC21) の展開

国際学術交流活動は、各部署の日常的業務ではある

が、特に全学的な取り組みとして、「国際学術コンソーシアム (AC21)」を創設した。これは、世界各国の25大学(機関)からなり、大学が社会に対する使命を国際的に果たすことを目的とする組織である。本学に事務局 (AC21推進室) を置き、学生・教職員の交流、ベンチマーキング、連携教育プログラムの開発等を日常的に行っている。

◎ 学長を中心としたマネジメント体制

法人移行後、7名の理事を置きこのうちの5名を副総長とし、総長の特命事項の企画等を行う総長補佐と一体となり、研究教育の推進に関して総長をサポートする体制の一層の強化を図った。平成18年度から、研究・国際交流担当の副総長が兼務していた産学官連携については専任の副総長を置き、研究・国際交流担当の副総長は、21COE等本学の研究プロジェクトの研究成果による国際共同研究推進を図った。また、研究・国際交流担当の副総長・総長補佐2名は、研究・国際交流委員会等を主宰して21COEの取りまとめを含め、全学的視点に立った研究推進施策の検討を研究推進室と連携し行っている。なお、21COE等本学の研究プロジェクトに対する組織的支援は、総長の強いリーダーシップと執行機能を持つ役員会の責任のもと、総長直属の「教育研究推進プロジェクトチーム」が研究推進室と連携して行う。将来構想と関係した各拠点への支援方策等は、以下のとおりである。

1) 学内資源の配分

- 1-1) 予算措置
- 1-2) 研究スペースの確保
- 1-3) 人的支援措置

2) 研究拠点形成の促進

- 2-1) 高等研究院の活用
- 2-2) 若手研究者の育成
- 2-3) 評価体制

3) 成果の発信・活用と研究拠点の継続性

- 3-1) 成果の発信・活用
- 3-2) 研究拠点の継続性

3. 達成状況及び今後の展望

将来構想及び研究拠点形成のための支援方策は、中期目標・中期計画に具体化し、総長のリーダーシップと強力なマネジメント体制により着実に実施してきた。このことは、21COE中間評価における全般的に高い評価となって現れてきている。以下は、具体的な達成状況と今後の展望である。

1) 研究教育組織の整備

1-1) 高等研究院の創設と展開：学内アカデミアとしての高等研究院の機能を強化し、名誉院長、院友、外国人副院長等を任命できるようにするとともに、若手研究者育成プログラムを開始した。

1-2) 領域型研究教育組織の先端化と文理融合型研究教育組織の創設：平成17年度に、エコトピア科学研究機構をエコトピア科学研究所に改組するとともに、科学技術・学術審議会に附置研究所として申請し平成17年8月に認められた。これにより、本研究所と環境学研究所と併せ、環境学の学術研究・応用研究の両面での推進体制を整えた。

1-3) 全学共通基盤組織の整備：研究教育基盤整備のために、平成17年度は、国内だけでなく海外にも積極的な広報活動を展開するための「広報室」、教職員だけでなく外国人研究者等も利用できる「学内保育所」、国際戦略を一層推進するための「国際企画室」を設置した。また、平成18年度は、21COE等の本学の研究プロジェクトへの支援等、全学レベルの研究を推進するため「研究推進室」を設置した。さらに、大型基盤研究を推進することを目的とした「名古屋大学小型シンクロトン光研究センター」を平成19年度に設置した。

2) 社会連携推進体制の整備

本学は、社会連携推進体制の確立を目指して、社会連携室、産学官連携推進本部、知的財産部を設置し、積極的な外部人材の登用、知的財産に関する諸規定の整備等を含めた体制の整備を行ってきた。平成17年度に、地域の産業界との更なる連携強化を目的に地元企業等を会員とする「名古屋大学協力会」を設立した。また、本学の研究成果を結集し組織的かつ強力な産学官連携・社会貢献を推進し、国際的な貢献をも推進できる体制に整備するため、産学官連携推進本部を見直し、知的財産部に加え、起業推進部、連携推進部、国際連携部を置き、専任教員を配置した。

3) 国際学術コンソーシアムの展開

国際学術交流活動は、各部局の日常的業務ではあるが、全学的な取り組みとして「国際学術コンソーシアム」を創設し、国際学術フォーラム、世界学生フォーラムを開催した。なお、国際学術交流活動を全学的レベルに立っての支援を行うとともに、全学的な連携のもと積極的な国際学術交流を推進するための基盤整備を図るため「国際企画室」、中国の大学等との国際学術交流を積極的に推進するため「名古屋大学上海事務所」を平成17年度に設置した。また、国際学術交流の展開を更に積極的に推進するためには、各部局のミッション達成を支援するとともに、全学的な連携による組織的な国際学術交流活動のできる体制を図るため「国際交流協力推進本部」を平成18年度に設置した。

4) 学内資源の配分

4-1) 予算措置：重点配分に際し、1拠点あたり5

年間で計900万円を配分し、拠点事務体制の構築を支援した。

4-2) 研究スペースの確保：高等総合研究館、総合研究棟の1,105㎡を拠点に措置した。さらに、新築・改修した総合研究棟の20%の全学共通スペースについて優先的に利用を認めた。

4-3) 人的支援措置：全学的にプールした教員定員を活用し、特に必要度の高い拠点に対して研究者を措置することが可能な体制を整えた。

5) 研究拠点形成の促進

5-1) 高等研究院の活用：研究専念組織である高等研究院（初代院長：野依良治・本学特別教授）を活用し拠点形成を支援した。本院に、研究に専念する流動教員を置くことし、学内公募を行い厳正な審査により39名を任命した。このうち、21COE研究拠点メンバーは計31名に上る。これら流動教員については、授業担当や管理運営等の実務を免除ないし大幅に軽減し、研究への専念をサポートした。

5-2) 若手研究者の育成：若手研究者が独立して研究を遂行できる財政的援助と研究スペースを特に用意した。

5-3) 評価体制：21COEプログラム研究拠点を含む、名古屋大学の世界最高水準の研究に対する評価・助言を得るため、ノーベル賞受賞者を含む委員で構成する「International Advisory Board」を設置し、研究拠点等に対する評価・助言を得た。

6) 成果の発信・活用と研究拠点の継続性

6-1) 成果の発信・活用：平成15年12月に東京で、平成16年11月に大阪で、21COEプログラムの研究テーマを主題とした「フォーラム」を開催し、拠点リーダーによるプレゼンテーション、拠点のビデオ紹介、展示ブースによる研究成果の説明等を行った。また、AC21等の組織・フォーラムを通じて、研究成果の国際的発信を行った。

6-2) 研究拠点の継続性：このような大学が取り組んできた拠点形成活動によって、21COE拠点が専攻等を母体とした研究センターに発展・進化し、先端的研究を通じた教育の拠点となってきた（構造生物学研究センター、プラズマナノ工学研究センター等）。

なお、研究拠点形成に関係した若手研究者については、研究拠点形成終了後も関連分野の研究を発展的に継続できるよう、特段の配慮を払った。

また、研究拠点にRAとして雇用されていた大学院博士後期課程の院生については、雇用が継続できるよう、総長裁量経費により約1億円を充当した。

名古屋大学は、世界レベルのより高度な研究能力を有する人材育成の場として、一層の充実と発展を目指している。そのために、21COE、関連学内研究所・センター等を集合させ「グローバル高等教育研究機構」を創設する。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	名古屋大学	学長名	平野眞一	拠点番号	D08	
1. 申請分野	A<生命科学> B<化学・材料科学> C<情報・電気・電子> D<人文科学> E<学際・複合・新領域>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	統合テキスト科学の構築 (Studies for the Integrated Text Science) ※副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)					
研究分野及びキーワード	<研究分野:史学>(美術史)(仏文学)(統語論)(史料学)(文化人類学)					
3. 専攻等名	文学研究科人文学専攻					
4. 事業推進担当者	計 15 名					
ふりがなくローマ字 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) SATO Shoichi 佐藤 彰一	文学研究科人文学専攻・教授	西洋中世史 博士(文学)	ヨーロッパ中世史記録の研究と全体の統括			
ABE Yasuro 阿部 泰郎	文学研究科人文学専攻・教授	日本文学 文学修士	日本中世宗教記録の研究			
WAZAKI Haruka 和崎 春日	文学研究科人文学専攻・教授	人類学 博士(社会学)	西アフリカ口頭伝承の研究			
SASAKI Shigehiro 佐々木重洋	文学研究科人文学専攻・助教授	文化人類学 博士(人間・環境学)	西アフリカ民族儀礼の研究			
MIYAJI Akira 宮治 昭	文学研究科人文学専攻・教授	美術史学 文学博士	インド図像記録の研究			
KIMATA Motokazu 木俣 元一	文学研究科人文学専攻・教授	美術史学 文学博士	ヨーロッパ図像記録の研究			
WADA Toshihiro 和田 壽弘	文学研究科人文学専攻・教授	インド哲学 Ph. D.	インド哲学記録の研究			
TAKAHASHI Toru 高橋 亨	文学研究科人文学専攻・教授	日本文学 文学修士	日本古代・中世文学記録の研究			
MATSUZAWA Kazuhiro 松澤 和宏	文学研究科人文学専攻・教授	仏文学 博士(文学)	フランス近代文学記録の研究			
AMANO Masachiyo 天野 政千代	文学研究科人文学専攻・教授	英語学 博士(文学)	文字記録と統語論の研究			
MACHIDA Ken 町田 健	文学研究科人文学専攻・教授	言語学 文学修士	文字コミュニケーションと言語研究(ヨーロッパ)			
KUGINUKI Toru 釘貫 亨	文学研究科人文学専攻・教授	日本語学 博士(文学)	文字コミュニケーションと言語研究(日本)			
INABA Nobumichi 稲葉 伸道	文学研究科人文学専攻・教授	日本史学 博士(歴史学)	日本中世寺社記録の研究			
EMURA Haruki 江村 治樹	文学研究科人文学専攻・教授	日本史学 博士(歴史学)	中国古代文字記録の研究			
SUTO Yoshiyuki 周藤 芳幸	文学研究科人文学専攻・助教授	西洋史学 博士(文学)	ヨーロッパ古代歴史記録の研究			
5. 交付経費(単位:千円)千円未満は切り捨てる ():間接経費						
年 度(平成)	1 4	1 5	1 6	1 7	1 8	合 計
交付金額(千円)	50,000	62,000	63,000	63,000 (6,300)	58,740 (5,874)	296,740

6. 拠点形成の目的

本プログラムは、歴史学、文学、美術史学、言語学、哲学、人類学の6分野を包摂している。これらの領域の対象である文字・言語・図像・身体所作の記録を「テキスト」として読み解き、その背後に横たわる「普遍文法」を剔出することを目的としている。20世紀までの人文科学の主要な動向は、それぞれのデシプリンの独自性を深く掘り下げることには主眼がおかれた。しかし1980年代頃から顕著となったコミュニケーション様式の根本的変革は、そうした動向に転換を迫っている。20世紀哲学の主要な潮流であった現象学は、われわれの認識論の地平を拡大し、人間同士の意思疎通の様式であるコミュニケーションに関しても、実証的、實在論的、機械論的見方にとどまることなく、認識の地平を押し広げるよう促している。一見すると互いに隔たった様式である文字や身体所作、そして図像などの意思伝達の媒体が、実はより高次のレベルでは、単一の統合的な原理に従って作動する意思伝達の体系であるという可能性を、学際的に探究することは、人文的知の領域をさらに深く極め、この問題の広汎な連関から多くの分野での革新的な認識が期待されるのである。そうした人文的知の革新の国際的センターとしての「テキスト学」の拠点を作るのが、われわれの目的である。

7. 研究実施計画

①上記の拠点形成目的に合わせ、事業推進担当者の専門領域を踏まえ、史料部門、文学部門、思想部門、画像部門、身体所作部門、言語部門の6部門を編成し、それぞれに部門責任者を配置した。そして5年間のプログラム採択期間を、4段階に区分し、最初の段階を第1クールとして平成14、15年度をこれに充てた。この時期は史料部門が「統治と文字記録」、文学部門が「作者とテキスト」、思想部門が「ジャンル発生論」、画像部門が「テキストとしての画像の存在構造」、身体所作部門が「儀礼的パフォーマンス記号的位相」、言語部門が「言語と画像・身振り記号の関係」がそれぞれのテーマである。第2クールは平成16年度を想定し、それぞれの部門が「テキストの保存・伝承・消滅」、「草稿・写本と作品」、「テキストと注釈書」、「画像の話法」、「儀礼的パフォーマンスの社会的参照枠」、「諸コミュニケーション形態の理論化」のテーマを掲げた。第3クールは平成17年度を実施時期と想定し、「歴史テキストの論理」、「作品と相互テキスト性」、哲学テキストの生成論、「画像テキストの分節体系論」、「儀礼的パフォーマンスの記号論」、「諸コミュニケーション形態の理論化」を、それぞれの部門の課題として設定し、第4クールは最終年度にあたる平成18年度であり、各部門の成果をもちより、理論面での柱となる言語部門が中軸となって、その成果を基礎に統合的な考察を深め、「普遍文法」への接近をはかるとするのが年次的な研究計画の概要である。

② a) 本プログラムが学際的性格を有することを考慮して、まず事業推進担当者が問題意識を共有するために、定例の研究会を開催し、報告と討議を全て出版する方針を掲げた。これは報告と発言が記録として公刊されることで、出席者が真摯に領域横断的な思考へ取り組まざるえない規制力として働くことを考慮したものである。b) 日本語と欧文の2種類の定期刊行物『SITES』の創刊、c) 国際研究集会の年2回の開催と欧文中心のプロシーディングスの出版、d) COE研究員の肩書きでの、ポスドク研究者の雇用。e) 学外の研究教育用施設の借り上げ。これはとりわけCOE研究員の研究空間として構想された。COE研究員をそれぞれの専門に応じて各講座研究室に研究場所を措置するならば、どうしても既存のデシプリンの桎梏に捉えられ、領域横断的な思考が妨げられやすい。その解決策として名古屋駅近くの国際センタービルの15階にオフィスを借り上げ、COE研究員が常時勤務する場所とし、同時に社会発信の一環として「オープンレクチャー」

と称する月例講演会を開催し、一般聴衆に研究の成果を分かり易く解説するための施設として利用することを考えるなどの計画を立てた。

8. 教育実施計画

- ① 学部学生への教育として、共通教育レベルでの授業として「統合テキスト学入門」を、また専門課程学生向けの授業として「電子テキスト学」を開講する。
- ② 前期後期を含めての大学院学生に対しては、事業推進担当者の研究補助・支援と国際研究集会への参加 およびリサーチ・アシスタントとしての雇用が中心的な教育計画となる。
- ③ 本プログラムが、先端的で国際的な研究拠点の創出を課題としていることに鑑み、研究面での最大の力点をおいたのがポスドク・レベルの優秀な研究者の育成であり、COE研究員の雇用はこれを目的としている。COE研究員はそれゆえ事業推進担当者の補助的スタッフではなく、本プログラムの研究課題を自らのデシプリンを基礎に探究する独立した研究者として位置づけている。学外にCOE研究員の研究場所を措置したのも、そうした理由による。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

人文科学における「解」への到達は、数学的明証性と一義性とは異なる。私どものプログラム「統合テキスト科学の構築」は、その形態の差異を越えて、あるいは形態的差異の背後に、言語、文字、図像、身体所作などのテキストが等しく共有する「普遍文法」の類いが存在するという作業仮説に基づき、これを剔出することを学問的な課題とした。

5年間にわたる事業推進担当者とCOE研究員、リサーチ・アシスタントならびに国際研究集会の折に、報告を引受けてくれた事業推進担当者以外の研究科スタッフ、国内外の招聘報告者の協力により、研究と教育の両面で「想定以上の成果を挙げた」というのが、私どもの自己評価である。その根拠として紹介できるのは、狭義の研究課題、すなわち種類の異なるテキストを通貫して確認されるのは、各テキスト形態が明示的な意味と非明示的な意味を伝達する要素を等しく内在させているという認識である。前者は「顕在テキスト」、後者は「潜勢テキスト」と称することができる。後者は受信者により構築されるテキストであるが、その契機となるのがコンテキストである。文字で書かれた、あるいは図像形式で、または身体所作で具現される知覚可能な表現形式に、すべての情報・意味が含まれているのではない。非明示的な意味を伝達している「文字化されていない部分」(カウンター・テキスト)や、図像テキスト内部の「図形間の関係」、身体所作の実現さるべくしてされなかったパフォーマンスは、コンテキストの蠕動により直ちに顕在テキスト化する潜勢を秘めているのである。こうした認識論的な発見については、私どものプログラム最終報告書『統合テキスト科学の地平』に詳しい。

さらに研究計画で提示した、トランス・デシプナリ一な方向性を担保するために行なった研究会について、報告と議論を共に収録した「討議資料」を4冊刊行し、問題意識の共有涵養媒体としての役割を十二分に果たした。また、和文篇、欧文篇各1冊を毎年刊行した定期刊行物『SITES 統合テキスト科学研究』を計8冊出版し、寄稿論文の中には海外の一流研究者によって引用されたものもある。

特筆すべきは、5年間のプログラム採択期間の間に行なわれた計11回の国際研究集会である。先に紹介した6部門全部が、海外の著名で、実力をそなえた第1

線の研究者をゲスト・スピーカーとして招待した国際的コロキウムは、文化的特殊性を理由に国内に閉じこもりがちな人文科学の弊を打破する先鞭をつけることができたと評価しても構わないであろう。2006年10月にはフランスのエクサン・プロヴァンスにおいて、プロヴァンス大学との共催という形で実施し、プロヴァンス大学長主催の晩餐会も開かれ、国際的学术交流が純粹に学問だけではなく、学問を取り巻く文化の側面も無視できない要素であることを、8人の参加者が肌で体験したのも貴重である。国際研究集会の頻繁な開催は、確かにそのために用いる時間と労力の大きさから懸念すべき面もなくはないが、大学院学生を含む若手研究者への知的刺戟は計り知れないものがある。招待講演者の選定、主題の説明と交渉、下準備、さらに事後のプロシーディングスの出版など一連の必須作業は、不慣れな専任スタッフの経験を豊かにし、若手には将来研究者として独立してこのような計画に直面したときの技術的ノウハウをもたらす、重要な機会となった。なお国際研究集会のプロシーディングスは、最後の第11回のそれを除いて、既に刊行されており、第11回のそれも鋭意作成中である。

10点のプロシーディングスは、最初の1点を除いて和欧2言語か、それとも欧文のみである。私どもの主眼が欧米への発信にあったからである。それゆえ、外部評価に関しても、2人の外部評価者をフランス人と、アメリカ人から選任し、委嘱した。評価対象印刷物は1点を除いて(この1点にもフランス語の論文が収録されており、また英文タイトルからおおよそ内容は把握可能である)英語もしくはフランス語のテキストが付せられ、十分内容に立ちいった精査が可能である。2名の評価者のひとりフランス国立科学研究機構

(CNRS)の研究員であり、かつソーシャル研究所の所長を務め、フランスにおけるテキスト学の第一人者のフランソワ・ラスチエ博士はその評価報告書の中で「文献学、特に生成論については、生成批評にたずさわる日本人の研究者たちの実証的な特性が特筆されるに値する」、「日本の同僚たちは文献学の内部において変革を進めており、対象に対する彼らの敬意とそして分析の正確さは際立っている」と高く評価している。またもうひとりのカリフォルニア大学歴史学部卓越教授パトリック・ギアリ博士も「このプロジェクトは高度な成功を収め、学問的生産の点で優れているというのが私の専門家としての意見である」と評価している。これらの諸点を総合するならば、先の自己評価は十分に妥当なものと言えよう。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与
若手の人材育成は、私どもが最も力を入れた点の一つである。なかでも意を注いだのはポストドク研究者の育成である。これを本プログラムは「COE研究員」という名称で雇用し、プログラム推進の重要な担い手として位置づけた。採用に当たっては、部門責任者が構成する審査委員会で業績と人柄を厳正に審査して、任用した。条件は博士号取得者であることである。名古屋大学以外からも、推薦をもとに広くリクルートを行なった。後期課程の学生は、COE研究員の予備軍として位置づけられた。

これらCOE研究員は、学外に確保したオフィスで、週4～5日研究に従事するという内容であった。学外施設のメリットは、先にも指摘したように、トランス・デシリナリーな知的雰囲気容易に醸成されるところにある。専門領域を異にする同僚との意見交換が日常的となり、異分野横断的発想が生まれ易いからである。COE研究員は定期的な研究会、合宿研究会、ブリーフィングと称する短時間の研究説明会などでの報告を基礎に雑誌『SITES』への寄稿を義務づけられた。またほぼ年2回の頻度で開催された国際研究集会の準備と運営に協力し、この種の研究会議の運営についてのノウハウを習得し、積極的に海外の一流研究者と学問的交流を展開した。外部評価を担当した米国の歴史家はその外部評価報告の中で「2006年11月に名古屋の会場を訪問した際、メンバーの間で世代を超えて、分野横断的な真の交流を育んだ点でも優れていると判断した」と高く評価している。

若手研究者の育成については当プログラムの目的の一つであったが、プログラム実施期間中に雇用されたCOE研究員のうち、合計7名が国立大学行政法人と私立大学に専任教員として採用された。内訳は名古屋大学(2)、東京大学(1)、弘前大学(1)、高知大学(1)、鹿児島国際大学(1)、琉球大学(1)である。

当プログラムに関わったCOE研究員は、それぞれの学会において先端的なアカデミック・ポジションを得て継続的に活動しているが、このうち2005年まで在籍した研究員は、日本フランス語フランス文学会賞(2004)、文化人類学会賞(2006年)を授与された。COE研究員のほか、本プログラムにRAの身分で参加した博士課程学生にも優れた教育効果をもたらした。拠点推進担当者が関与する専門は、総計11講座に及ぶが、プログラム実施期間中も博士学位取得者の育成は、たゆみなく行われ、5年間で126名の学位取得者を輩出し

た。また、大学内においても当プログラムは専用のフロアを2床、学内コンペティションによって獲得し、研究員および博士課程大学院生の研究環境の向上に貢献した。このような研究スペースの確保も、教育研究拠点形成にとって重要な課題である。

このように、本プログラムは人材育成面においても成功を収めたことを示している。

3) 研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等すでに触れたように、テキスト形態を異にする文字

(歴史、文学、思想、言語)、図像、身体所作の各テキストは、「顕在テキスト」と「潜勢テキスト」から構成されている。テキストがこの2要素から構成されるという統合理論としての「意味伝達媒体」の理論モデルは、テキストとみなされる人間の表現行為はおよびその成果を「顕在テキスト」と同一視しえないことを物語る。現象学的認識論が示しているように、人間の認識機能は必ず「地平」により区切られている。そしてそれは認識者が歩を進めるごとに、緩やかに立ち現われるのである。不可視の認識対象として「潜勢テキスト」はあり、それはコンテキストの揺るぎにより絶えず変化する。逆の視点から見れば、私どもが「顕在テキスト」としてその実在性を疑いえない実体は、ある一瞬のコンテキスト性の賜物でしかない。しかし、同時にそれは一瞬のコンテキスト性の果実という点において、絶対的な現実でもある。この点は決して揺るがせにできない認識論の核心である。あらゆるテキストの認識論地平には、コンテキストの不安定性がつくり出す「潜勢テキスト」と、それにもかかわらずあるコンテキスト局面における「顕在テキスト」の不動性というパラドクスが内在している。

これが私どもの「統合テキスト科学」の理論的到達点である。それがもたらす人文科学上のインパクトは決して小さくない。たとえば歴史学を例にとってみよう、様々の多様な変化するコンテキストのもとに叙述によって切り取られた歴史的過去を、それぞれが記述されたコンテキストを検討せずに、集合して歴史の流れを描き出すという作業がいかに無効であるかが、ここから明らかである。まずもって、残された記録がいかなるコンテキスト性の所産であるかが解明されなければならないという、実は歴史学研究にとって最もオーソドックスで基礎的な学的要請の重要性が露になるからである。本プログラムのリーダーである佐藤彰一が著した『歴史書を読む―歴史十書』のテキスト科学―や、事業推進担当者のひとり松澤和宏の著書『生成論の探求―テキスト・草稿・エクリチュール』

などは、プログラム課題の代表的個別研究である。このような学術的成果を踏まえて、目下申請中のグローバルCOEプログラムに、私どもは「テキスト布置の解釈学的研究と教育」と題する教育研究計画を取り上げた。これはまさしく顕在テキスト、潜勢テキスト、コンテクスト、この三者の関係をさらに立ち入って解明し、19世紀に確立した自然科学をモデルとする実証主義的、實在論的、機械論的なテキスト認識を根底から革新することを目指したプログラムであり、人文学的知の復権をめざした企てなのである。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

5年間にわたる共同研究において、研究チームとしての有機的連携は日頃の研究会や合宿研究会での討議で十分に涵養されたと言える。その雄弁な証拠は、各部門責任者が万遍なく国際研究集会を組織し、主催したという事実に現われている。プロジェクト・リーダーの指示ではなく、それぞれの部門責任者が部門の研究の波動に応じて企画し、開催したが、それが期せずして高い水準で均一化したのは、どれほど事業推進担当者間で連携が実質的であったかを実証している。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

大学が競争的環境にある、しかも国内的だけでなく国際的である事情を見るならば、人文学の分野でこの面での卓越化の潜在性は、極めて高い。それというのも日本の人文学に有利な条件は、歴史、文学、語学などの分野での厚い蓄積であり、未来の欧米の人文学の諸理論の陶冶にとっても、宝庫だからである。1例を挙げるならば、先述したプロヴァンス大学でのジョイント国際研究集会で、古代日本における文字化についての報告を、フランス語をたえて使用する機会のない同僚の日本古代語の専門家が、フランス語で報告した。それは予想した通り、フランス側の言語学の専門家の間に大きな反響を巻き起こしたのである。こうした日本固有の学問分野を含めて、海外発信に意を注ぐことで、国際的な評価が高まり、研究者だけでなく、欧米の学生をも知的に惹き付け、ひいては国際競争力を高める大きな要因となる。その種は本プログラムで播かれたと言える。

6) 国内外に向けた情報発信

私どもは合わせて6系統の情報発信ジャンルを持った。a) 雑誌『SITES』8冊、b) 国際研究収集会プロシーディング10冊、c) 討議資料4冊、d) 最終報告書1冊、e) 欧米の招聘研究者講演翻訳集1冊、f) 一般市民向け講演会39回である。このうち a) の欧文篇と b) は欧米語で出版したため、欧米の研究者を含めワ

ルドワイドな評価を得た。先に述べた外部評価者の陣容もこれなくしては考えられない。それ以外はf)を除き、専ら専門の国内研究者に向けての発信であり、これは論文内容だけでなく、印刷物としてのクオリティの高さが、関係者の中で高く評価されと仄聞している。最後のオープンレクチャーは一般市民向けの講演会であるが、会場の広さもあり、参加人数は20〜30人程度であるが、固定した参加者があり、カルチャーセンターでは飽き足りない知的関心の強い人々に、最先端の人文学の状況を知ってもらう好適な企画であった。

7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のため効果的に使用されたか)

給付された研究費の半分以上が、COE研究員の給与と学外施設賃借料に費やされた。そしてそれはまさしく予想していた以上の効果を上げた。消耗品費や設備備品費にも費やしているが、それらはできれば他の予算で手当てして欲しい旨を事業推進担当者に了解してもらった。国際研究集会や人件費、施設借料、印刷費が多くを占めたが、こうした使途は、対費用効果で言うならば、最大の効果を上げたと言えよう。

②今後の展望

現在グローバルCOEプログラムに申請中であり、今後とも国際発信を継続し、さらに広汎に展開する予定である。予算上可能であれば、更に多くのCOE研究員を、国内外を問わずリクルートして、将来の優秀なテキスト学者を養成する構想を持っている。研究主題については、既に縷説したように、テキスト布置の解釈学的研究の方向で、さらに展開する予定である。

ひとつの重要なポイントは、日本学の成果をいかに欧米の日本学の非専門家の研究者たちに浸透させるかである。わが国の人文学研究が世界の人文学推進にとって、どれほど貢献のポテンシャルを秘めているかを知らしめるのは大きな意味がある。この点に留意する時、人文学の個別実証研究を欧米の研究者にも理解可能な言語で叙述することの重要性を、再度力説しておかねばならない。

③その他(世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度)

世上、大学のランク付けの中で云々されている位置と、研究の現場での実践水準の感覚に齟齬があることが、大学内部にも認識として浸透したことは、今後の研究の組織化や、意識改革の面で効果的であった。研究の個人評価は技術的に困難な面もあるが、研究の活性化にとって必須の要素であることが再確認された。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	名古屋大学	拠点番号	D08
拠点のプログラム名称	統合テキスト科学の構築		
<p>1. 研究活動実績</p> <p>①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの <p>※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入</p> <p>波下線（_____）：拠点からコピーが提出されている論文</p> <p>下線（_____）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</p> </div> <p>●</p> <p>Sho-ichi SATO, “Le passé et le présent dans le mariage des Mérovingiens selon Grégoire de Tours: l’annoncé et la con narrative”, C, Carozzi et S. Sato (ed.), <i>Histoire – Fiction –Représentation</i>. Proceedings of the Eighth Inte Conference, Studies for the Integrated Text Science, pp.65-74, 2007.</p> <p>Akira MIYAJI, “The Genesis of Buddhist Images: System of the Integration with other Religions into Buddhism”, <i>SITES Journal of Studies for the Integrated text science</i>, vol.4, no.1, Graduate School of Letters, Nagoya University, pp.79-101, 2006.</p> <p>Motokazu KIMATA, “Le vitrail de saint Lubin à la cathédrale de Chartres : hagiographie et thèmes eucharistiques au début du XIIIe siècle”, <i>Histoire-Fiction-Représentation</i>, pp.147-154, 2007.</p> <p>Toshihiro WADA, “The Generation of Sanskrit Texts in the New School of Indian Logic (2): From Gangesa’s <i>Tattvacintamani</i> to Its Commentaries”, <i>SITES, Journal of Studies for the Integrated Text Science</i>, 2(1), pp. 43-58, 2005.</p> <p>Masachiyo AMANO, ‘Toward a More Restrictive Characterization of Grammaticalization,’ A Review Article of <i>Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization</i>, Ian Roberts and Anna Roussou, Cambridge University Press, Cambridge, 2003. <i>English Linguistics</i>, vol.23, No.1, The English Linguistics Society of Japan, pp.58-85, 2006.</p> <p>町田健, 「テキストの種類と構造」, Masachiyo AMANO (ed.) <i>Multimodality:towards the Most Efficient Communication by Humans</i>. Proceedings of the Sixth International Conference. Studies for theIntegrated Text Science, pp.135-142, 2006.</p> <p>Toru KUGINUKI, “Naissance de la mise en écriture de la langue indigène dans l’antiquité japonaise”, C, Carozzi e (ed.), <i>Histoire – Fiction – Représentation. Proceedings of the Eighth International Conference, Studies Integrated Text Science</i>, pp.97-106, 2007.</p> <p>Yoshiyuki SUTO, “Framing the Heroic Imagery of Tyrannicides: Visual Representation, Oral Tradition, and the Invention of History in Classical Athens”, <i>Historie-Fiction-Réprésentation</i>, 21th Century COE Program International Conference Series 8, pp.49-58, 2007.</p> <p>●</p> <p>佐藤彰一, 松澤和宏, 和田壽弘, 町田健, 木俣元一, 和崎春日, 平野克典（共著）『<u>統合テキスト科学の地平（最終報告書）</u>』, 273頁, 名古屋大学文学研究科, 2007年.</p> <p>Pierre Riché, Andreas Hartmann-Virnich, Huguette Taviani-Carozzi, Yoshiyuki Suto, Claude Carozzi, Sho-ichi Sato, Jean-Louis Margolin, Toru Kuginuki, André Delteil ChristianTouratier, Takayuki Kamada, Claire Fauvergue, Marc Griesheimer, Motokazu Kimata, Hidenori Kurita and Jacques Paul, <i>Histoire-Fiction-Représentation</i> (歴史・フィク</p>			

シヨン・表象) , Proceedings of the Eighth International Conference held in Aix-en-Provence, 23-25 October, 2006. 178p. published in 2007, Graduate School of Letters, Nagoya University.

Kazuhiro Matsuzawa, Hiroshi Abe, Hideo Nomura, Claire Fauvergue, Toru Kuginuki, et François Rastier, *Saussure et la science des textes*, Proceedings of the Ninth International Conference, held at Nagoya University, 3-4, November 2006. 166p. published in 2007, Graduate School of Letters, Nagoya University.

②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

- 第1回国際研究集会「中世宗教テクストの世界へ 中世寺院聖教テクストの生成と展開—真福寺伝来の頼瑜 聖教を対象に」(2003年2月21日～23日、名古屋大学文学研究科会議室、大須観音真福寺宝生院本堂下セミナールーム)、参加人数 110(20)名、主な招待講演者: ニコル・ルメートル (パリ第一大学教授)、ジャン＝ルー・ルメートル (ソルボンヌ高等研究院)、高橋秀栄 (金沢文庫文庫長)
- 第2回国際研究集会「言語テクストの創造と活用」(2003年6月6日～8日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 115(30)名、主な招待講演者: David Butt (Macquarie University, Australia), Michael O'Toole (Murdoch University, Australia) Olga Fischer (University of Amsterdam, The Netherlands)
- 第3回国際研究集会「テクストとその生成」(2003年11月23日～24日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 80(15)名、主な招待講演者: Anne Hershberg-Pierrot (Université Paris VIII), Jean-Louis Lebrave (ITEM), Pierre-Marc de Biasi (ITEM)
- 第4回国際研究集会「歴史テクストの生成 テキスト／コンテキスト」(2004年9月16日～17日名古屋大学野依記念学術交流会館 2F カンファレンスホール)、参加人数 100(25)名、主な招待講演者: Joseph Manning (Stanford University), Michel Sot (Université Paris IV), Dominique Barthélemy (Université Paris IV)
- 第5回国際研究集会「宗教美術におけるイメージとテクスト」(2005年1月22日～23日、名古屋大学大学院文学研究科2F237講義室)、参加人数 75(20)名、主な招待講演者: Christian Heck (Université de Lille III), 鷹巣純 (愛知教育大学)
- 第6回国際研究集会「多重伝達形態論」(2005年10月28日～30日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 120(30)名、主な招待講演者: Theo van Leeuwen (University of Technology, Sidney), Geoffrey Williams (University of British Columbia, Canada), Kay O'Halloran (National University of Singapore)
- 第7回国際研究集会「インド哲学における伝統と想像の相克」(2005年12月3日～4日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 80(20)名、主な招待講演者: Johannes Bronkhorst (University of Lausanne), Parimal Patil (Harvard University), 下田正弘 (東京大学)
- 第8回国際研究集会「歴史・フィクション・表象」(2006年10月23日～25日、フランス Aix-en-Provence 大学)、参加人数 60(50)名、主な招待講演者: Claude Carozzi (Université de Provence), Pierre Riché (Université de Paris X), Huguette Taviani-Carozzi (Université de Provence)
- 第9回国際研究集会「ソーシャルとテクストの科学」(2006年11月3日～4日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 80(20)名、主な招待講演者: François Rastier (CNRS, Institut Saussure), 阿部宏 (東北大学), 野村英夫 (元早稲田大学教授)
- 第10回国際研究集会「歴史・地図テクストの生成」(2006年11月17日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 70(15)名、主な招待講演者: Armelle Querrien (CNRS), Patrick Gautier-Dalché (EPHE), François Bougard (Université de Paris X)
- 第11回国際研究集会「身体・儀礼テクストへの関係論的アプローチ」(2007年1月20日、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール)、参加人数 65(10)名、主な招待講演者: Germain Loumpet (Université de Yaoundé), Pierre Petit (Université Libre de Bruxelles), Michael Houseman (Ecole Pratique des Hautes Etudes)

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

別添の様式4〈大学院生等の雇用状況〉に記した実施期間・人数にて、ポスドクおよび研究員やRAを採用し、拠点の研究活動に積極的に参加させることで若手研究者の育成に努めた。

ポスドクおよび研究員については、当拠点の各部門の推進担当者の推薦に基づき、推進担当者全体からなる選考委員会の厳正な審査を経て採用を行った。採用されたポスドクおよび研究員は名古屋国際センター内のCOEオフィスに常駐して研究活動に従事し、また当拠点が毎年刊行する研究報告集SITESへの論文の投稿および国際研究集会等での研究報告を行った。これらの多面的な活動を通じて研究能力や発表能力の養成を行った。

RAについても優れた大学院生の中から選抜し、資料の収集や国際研究集会等の準備作業に参加させ、研究能力の養成を図った。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成され、期待以上の成果があった

(コメント)

本プログラムの研究教育拠点形成計画全体については十分達成されたと判断する。

人材育成面では、学内外から採用されたCOE研究員が研究に専念できるオフィスを確保し、彼らの定期的な研究会を組織するなど、若手研究者に対する積極的な支援がなされている。そして、研究員のうち七名が専任教員として大学に就職するなど、大きな成果が表れている。

研究活動面でも、欧文学術雑誌を定期的に刊行し、日本国内のみならず、国外でも国際会議・シンポジウムを開催し、日本語と欧文による会議録を刊行している。本プログラムでは、国際的評価を意識したプロジェクトが着実に進められ、期待以上の成果が得られたと判断される。

大学の支援が不足しているという中間評価の指摘に対しては、文学研究科がキャンパス外のオフィスの賃借を支援するなど、適切な対応がなされたことが確認できる。

補助事業終了後の持続的な展開については、これらの成果を基盤とし、今後の更なる進展を期待する。